

新都市医師会長の紹介

岩内古宇郡医師会会長

大井 成夫 先生



平成30年5月10日に開催された岩内古宇郡医師会定時総会で、前会長の北山秀先生退任後の第19代会長に大井成夫先生が就任されました。先生は平成11年に同医師会へ入会し、理事を10年、議長を2年、副会長を2年務められていました。前北山会長と同じく、大井先生のお父様も第12代会長を務められており、2代続く親子での会長が続いて誕生することとなりました。

大井先生は昭和35年、岩手県の葛巻町にお生まれの現在58歳。昭和63年近畿大学医学部を卒業後、札幌医科大学第四内科（現 腫瘍・血液内科）に入局され、血液、消化器内科を研修し、学位を取得されました。その後、平成11年5月にお父様の開設した岩内町の診療所（現 大井内科消化器科医院）で副院長として勤務され、平成21年4月に院長に就任され現在に至ります。

先生の趣味は多彩で、ランニング中心のフィットネス、お酒、歌、音楽・映画鑑賞、読書、ドライブ、旅行、温泉、昭和中期古物コレクション、スキーのワクシングなどなど、挙げればきりが無いほどで、ご本人いわく「浅く・狭く・たくさん」をモットーにしているのだそうです。ここ数年は肉体的改造を目指しているようですが、服の上からはなかなか分かりません。ファストフードの食べ歩きも趣味の1つとのこと、このせいかもしれません。

岩内古宇郡医師会は岩内町・共和町・泊村・神恵内村の4町村を受け持ち、ほかの郡部と同様に常態化する医師不足のみならず、看護師不足も顕著です。当医師会も60歳前後の医師が大多数で、今後の会員数の急激な減少は明らかです。しかし、現在抱えるこの地区の高齢化医療、福祉をなんとか基幹病院である岩内協会病院、そして4町村役場とともに維持していかなければいけないという大きな問題をはじめ、新会長には今日まで先代の会長が築いてくれた会員同士の親睦・連携をさらに強め、当地区の地域医療を長く守っていく土台を築いていただきたいと思いを期待しております。

岩内古宇郡医師会
北海道医報通信員 寺山亜希子

室蘭市医師会会長

野尻 秀一 先生



平成30年6月の定時総会で13人の理事が選任されました。その後の理事会にて、室蘭市医師会第12代目の会長として稲川前会長の後を受け、野尻秀一会長が全会一致で選出されました。

野尻先生は昭和57年札幌医科大学を卒業され、同大学内科学第四講座に入局されました。平成元年新日鐵室蘭総合病院に初代の消化器内科医として勤務されました。同病院の消化器内科の構築に尽力されました。平成3年同病院消化器内科科長となり地域の医療に貢献されました。また、平成12年には同病院血液内科科長も兼任され、地域初の無菌室を立ち上げるなど血液学治療の分野でも大きく貢献されました。

平成15年11月に野尻内科消化器クリニックを開業されました。内視鏡治療を行うなど消化器内科の先進的な医療を行われています。また、急性期病院との間の病診連携に積極的に取り組み、地域医療に大きく貢献されています。

平成8年からは室蘭市医師会の理事をされ、がん治療対策としてがん登録を進めるなど貢献されています。また、他地域に先駆けて中学生のピロリ菌の検診・除菌の制度を立ち上げました。成人に対しても市の助成でピロリ菌検診制度を立ち上げ、胃がん予防に大きく貢献されています。その他にも稲川前会長が積極的に取り組まれたリレーフォーライフの運営にご活躍されました。

先生の余暇としては、スキューバダイビングをされているとのこと。積丹半島のろうそく岩のダイビングスポットにはよく行かれるようです。また、時間を有効に利用され、海外のダイビングスポットにも遠征されるとお聞きしました。

このようにバイタリティあふれる先生ですが、当地域では病院統合などの問題やスワンネットの運営など、多くの課題があります。先生は周囲への気遣いやリーダーシップをもって、この地域の問題を解決していただけたと思います。ご健康に留意され、ますますご活躍されるよう祈念いたしましてご紹介とさせていただきます。

室蘭市医師会
北海道医報通信員 生田 茂夫

滝川市医師会会長

文屋 学 先生



「エース登場」

今年度からの滝川市医師会第10代会長に就任された文屋学先生をご紹介します。

先生は札幌医科大学をご卒業後、第4内科に入局、昭和63年滝川市で文屋内科消化器科医院を開設されました。以後30余年にわたり地域医療を支えてこられました。現在は外来診療のみならず、訪問診療・介護にと急激な高齢化に対応すべく幅広く活躍されています。

医師会活動にも積極的に参加されており、平成14年から滝川市医師会の理事、平成26年から副会長を務められ、この度会長に就任されました。また平成27年からは滝川市三師会の会長を務めておられ、医療・介護ばかりではなく歯科・薬科をも含めた幅広い医療連携をリードされています。その連携の一つとして診療情報を共有する中空知医療連携ネットワーク（「そら-ねっと」）がスタートしました。滝川市医師会としては、安全で質の高い地域医療の実現と患者様の負担軽減につながるとして、広く会員に「そら-ねっと」への参加を求めました。先生は、医療連携を推進するリーダーとして、さらなる内容の充実にご尽力されています。

ご趣味は40代から始められたマラソンで、一月に2回以上のペースで道内各地のマラソン大会に参加されています。国際陸連公認のサロマ湖100キロウルトラマラソンは11回完走されており、10回以上の完走者に許されるブルーのゼッケン「サロマンブルー」の称号を得ておられます。20回以上の完走者に与えられる「グランドブルー」の話は聞きませんが、フルマラソンではもう一息だった「サブスリー」の夢はまだ諦めていないと笑顔でお話しされます。

そして、もう一つお好きなものがワインです。これらが実際の年齢よりはるかに若い秘訣なのかもしれません。

エネルギー溢れるお姿からは、これからの益々のご活躍が容易に想像されます。今まさに充実のエースを滝川市医師会長にお迎えすることができました。

滝川市医師会
副会長 西村 恒則

深川医師会会長

林 憲雄 先生



本年6月に深川医師会の新会長に就任された林憲雄先生をご紹介します。

先生は自治医科大学の1期生として、昭和53年に同大をご卒業されました。その後、旭川医科大学でのローテーション研修を経て同大の第3内科に入局され、稚内市、豊富町、利尻町、斜里町で研鑽を積まれました。昭和63年からは自治医科大学大宮医療センター総合医学講座の助手を務められ、平成2年に現職である深川第一病院院長として当地に赴任されました。爾来28年間にわたって北空知の地域医療に尽力されています。また、深川医師会の活動にも積極的に貢献されており、これまでに同会副会長や医師会附属准看護学院学院長などを歴任されました。

このたびの医師会長就任に際して抱負をお伺いしたところ、以下のように述べられました。

「北空知の医療圏は人口減少などによって2025年問題を先取りした状況である。急性期に対応可能な病院は深川市立病院のみであり、医師不足を痛感している。北空知の医療連携はもちろんのこと、近隣の3次医療機関との連携をさらに深め、住民の皆様不安を少しでも軽減したい。また、地域包括ケアシステムの構築に関連して、市立病院、地域の各病院、および各診療所の連携をさらに緊密なものとし、北空知の医療・介護・福祉の向上に寄与したい」

閑話休題。最後に林先生の人となりについて私見を述べさせていただきます（ちなみに小生は酒席で一緒にすることがほとんどです）。学生時代はラグビーに熱中されており、基本的に体育会系の方です。10年程前には2番アイアンで250ヤード飛ばしていました。他方、酒席で興が乗ると哲学・文学・歴史を語ります。酒はとにかく強いです。ただし、飲んでも乱れません。なかなか酒場を去ろうとしないのが難点です。面倒見が良いです。地域に医師を招聘する能力に長けています（従って、難しい時代の舵取り役として今最も相応しい方と考える次第です）。

深川医師会
副会長 松本 三樹

富良野医師会会長



小山内裕昭 先生

平成30年6月に行われた富良野医師会理事会において、羽根田俊前会長の後任として、小山内裕昭先生が就任されましたので、ご紹介いたします。

富良野には、“出戻り組”と呼ばれ、富良野が大好きで戻ってくる医師が多いのですが、先生もそのうちの一人です。先生は、釧路出身で旭川医科大学泌尿器科に入局後、昭和63年に富良野協会病院に着任されました。その後、遠軽厚生病院、小林病院、深川市立病院に勤務されています。平成4年に富良野協会病院泌尿器科医長として“出戻って”きてからは、透析室を開設・運営し、診療、手術と多忙な生活を送られています。平成18年に富良野協会病院副院長、平成19年に富良野医師会理事の救急担当に就任されてからは、高橋元医師会長、羽根田前院長を助けて、平成21年より“富良野方式”と呼んでいる救急体制を構築されました。そして、平成29年4月に医師会副会長、平成30年4月に協会病院院長、6月には医師会会長に就任され、現在は多忙な生活を送られています。

先生は仕事熱心、手術が大好きで、患者さんを依頼されても、いつでも快く引き受けてくださいます。同僚・後輩の面倒見がよく、先生を慕ってくる医局員、研修医も多いと聞きます。多忙のために、趣味のゴルフにはなかなか行けず、息子さんのところに遊びに行くのを楽しみにしているようです。日本酒が大好きで、以前は毎日のように飲みに出ていましたが、最近は健康を考えて控えているということでした。

富良野圏域の医療情勢は、医師数の減少、医師会員の高齢化、協会病院の内科医の不足など、難しい舵取りが必要な状況が続いています。多くの困難があり短期間での解決は難しいので、あわてずゆっくりと仕事をしてください。小山内会長を中心に、私たち医師会員も協力して乗り越えていきたいと思えます。

これからも健康に留意され、ますますご活躍されることを祈念して新会長の紹介とさせていただきます。

富良野医師会理事
北海道医報通信員 白田 克美

北見医師会会長



今野 敦 先生

一般社団法人北見医師会は平成30年5月26日に行われた定時総会理事会において役員改選が行われ、12年間にわたって会長を勤められた古屋聖児前会長の後任として、今野敦先生が第6代会長に就任されました。

今野敦先生は昭和32年北海道枝幸郡中頓別町のお生まれで、昭和57年に札幌医科大学医学部をご卒業され、札幌医科大学循環器内科に入局されました。留萌市立病院での勤務を経て、北見では道立北見病院にて循環器科部長として勤務された後、平成5年北見循環器クリニックを開設し、さらにこの地域で必要とされる介護老人保健施設や社会福祉施設も併設し、北見地域の医療や介護にも大きく貢献されておられます。

北見医師会では、平成22年から監事1期、副会長3期を務められておられます。今野新会長は会長就任にあたって以下のようにお話をされました。

北見医師会には多くの課題を抱えていますが、古屋前会長のご尽力にて多くの事案は解決いたしています。しかし、一方では、医療を取り巻く環境は年ごとに厳しさを増し、特に地方での医師不足は深刻です。さらに地域医療構想が浮き彫りにした地域の医療資源不足、医療と分担された介護保険制度などの新たな問題も次々と出現しています。

これらに対して今野会長は、心ある医療のシステム作りを急務の課題とし、具体的に13の課題とその難題に取り組むために、部会組織の新設と統廃合を行いました。北見医師会は一丸となって、北見市民の健やかな生活と健康を守り、安心して暮らせる地域作り邁進し、高齢者が安心して暮らせ、若い世代にも魅力的な地域となるよう、行政と強い連携を保ちながら「安心・安全な街作り」に協力して参ります。というお話でした。

今野先生は、きわめて真面目で、真剣で、熱い先生です。北見医師会のお仕事を約10年間、一緒にさせていただいておりますが、今野先生のご趣味については実は私はよく知らず、きっとお仕事なんだろうと思います。13の難題を解決するには、きっとそれなりの年月と覚悟が必要だろうと思います。これからますますご多忙になると思われますが、どうかご自愛ください。今野先生のお優しさとお人柄とご指導力があれば、この地域の多くの医療や介護問題も乗り切れると信じています。

北見医師会
副会長 木村 輝雄

札幌医科大学医師会会長

土橋 和文 先生



札幌医科大学医師会は昭和41年に設立され、地域医療支援、市民公開講座、学術活動助成、献体事業助成、国際交流、ボランティア支援などを行っています。平成30年4月1日付で附属病院長に任命された医学部病院管理学の土橋和文教授が新会長に就任しましたのでここにご紹介いたします。

土橋教授は北海道斜里町のご出身で、昭和56年に札幌医科大学を卒業、専門領域は内科学殊に冠動脈および不整脈疾患の診断・治療で、心臓血管インターベンション分野では本道の草分け的存在です。土橋教授は病院長就任のご挨拶で「医療環境変化への対応と地域医療計画の策定参画、医療高度先進化と機能分担推進、多職種および病院間・医療・介護の連携強化、働く時間と女性医師等の働き方改革、医学教育変革への対応：実習長時間化と国際認証、新専門医制度と卒前・卒後生涯教育のシームレス化、医療効率化と医療職の医業集中、ヘルスケア教育と未病医療推進、個人保護・倫理と臨床研究制度構築」を課題に挙げています。

附属病院では新病棟ができ、既存棟の改修工事が行われていきます。その中で①病床群再配置による多職種チーム医療の醸成②中央診療部門整備（手術室とICUの一括整備と目的別救命センター機能強化[多重外傷・火傷、災害医療、疾患別治療室]）③精神科救急④特殊治療センター[内視鏡、IVR、化学療法・腫瘍治療部門、神経機能センター]⑤未来医療の神経再生医療の実用化⑥がんワクチン療法⑦ゲノム医療の充実などが計画されています。

大学に求められる変革の大きさとスピードは驚くほどのもので、大学単独では解決できるものではありません。これまでも増して、札幌医科大学には北海道医師会と会員の皆様の情報共有が必要です。土橋先生には持ち前の誠実で人をまとめる高い力、粘り強い交渉力と柔軟性を存分に発揮され、大学と北海道医師会の密な連携を図っていかれることを期待します。

札幌医科大学医学部 薬理学講座教授
北海道医報通信員
堀尾 嘉幸

旭川医科大学医師会会長

古川 博之 先生



本年6月5日に開催された旭川医科大学医師会定時総会におきまして、3年間にわたって会長を務められた平田哲前会長の後任として、古川博之先生が新会長に選任されましたので、ご紹介させていただきます。

先生は1980年に神戸大学医学部をご卒業後、天理病院に勤務され研鑽を積まれた後、移植外科に魅せられて1987年に米国ピッツバーグ大学に留学され、移植外科の父スーパースター教授の元で肝臓移植外科医としてご活躍の後、1997年に北海道大学医学部附属病院第1外科助手として帰国されました。その後、同講師、同大学置換外科・再生医学講座教授を経て、2010年に外科学講座消化器病態外科学分野の教授として、旭川医科大学に赴任され、現在に至っております。

旭川の地に來られて、移植手術の文化や環境の無かった旭川医科大学病院で、真っ先に肝臓移植の準備を開始されました。まさにゼロからのスタートで、多診療科多職種の啓発、チーム作りを行い、道北道東で初めての肝移植を成功させるなど、移植文化を旭川の地に根付かせることに大きな情熱をもって取り組んでこられ、2017年には日本移植学会を旭川にて開催されて、多くの移植専門家がこの地に集うことにもつながりました。先生の思いは「移植医たち」という小説にも登場するほどです。

外科医の育成にも力を注がれ、私を含む他の外科教授らと結束して、大講座への統合を果たし、また、関連施設も巻き込んで一般社団法人旭川医科大学外科学講座教育支援機構を設立し、理事長として、開かれた魅力溢れる外科研修体制を提案し、多くの若手医師が外科の門を叩く時代を築かれました。

大学病院では、病院長補佐を3年3ヵ月、副病院長を3年務められ、この間、安全管理部委員長を9ヵ月兼任され、さまざまな会議で、患者ファーストのぶれない姿勢、道理の通らないことに物申す姿は、まさにこの難しい時代の大学医師会の舵取りを任せるとふさわしい人物であると確信しております。

いつも夜遅くまでお部屋の照明が消えず、メールのお返事もすぐにお送りいただく先生ですが、どうか健康には留意されて、頑張っている医療人が報われ、生き生きと働けるような、そんな新しい時代をリードしていただけたらと期待をしつつ、会長のご紹介とさせていただきます。

旭川医科大学 外科学講座血管・呼吸・腫瘍外科学分野
教授 東 信良